論破できるならしてみればいい

北本彩和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
論破できるならしてみればいい

【Ｎコード】
Ｎ５０９４Ｅ

【作者名】
北本彩和

【あらすじ】
ヘタレな男、早瀬桂が二日酔いから目覚めたところから始まるオムニバス。友人、従妹、従妹の友人それぞれの恋愛模様。

二日酔い（前書き）

コメディーになる予定です。

他の小説と違う雰囲気になっているはずです。切なさは、たぶんないと思います。

二日酔い

「頭痛テー、ここ、俺んちか？　な。」
断定して視線を動かした先、見慣れた目覚まし時計は1時20分を示している。
今日は日曜。昨日は俺の失恋記念で飲んだ。何を記念する必要があると思うが、飲んで憂さ晴らししたかったから話にのった。傷心の俺を励ます気持ちとからかう気持ちが半々ずつ。それもわかってた。それでよかった。
酒に弱い自覚はあるが、それなりに昨日は飲んだ。こんな時ぐらい飲んだっていいだろう。
失恋記念で、ある意味主賓だぞ？　急性アルコール中毒になったわけでなし。記憶無くしたのは失敗だったけどさ。長い人生こんなことも一度や二度はあるものさ。
酎ハイを三杯飲んだところまでは覚えている。そっから先がわからない。
家で寝てるってことは帰ってこれたのか。送ってもらったのか。送ってもらったんならまた借りが増えた。あのメンツで飲んでたなら、面倒みてくれたのは川口で間違いない。明日大学で礼を言っておこう。昼飯おごるくらいはさせられるな。しかたない甘んじてうけよう。
そんなことより頭痛い。頭だけじゃない、体中が痛い。特に腰が痛い。
記憶が飛んでいる間、何をしたんだ。考えてもムダか。
起きて薬を飲むのが先決。起きて、

「なんで裸なんだ！」
自分の声が響いて頭痛い。
ええっと。
状況を、調べよう。落ち着け、そうまずは落ち着け。
二日酔いで、裸で、腰が痛くて、体中が筋肉痛のような感じで痛くて、！　自分の胸にキスマークらしきあざを発見！
「俺はいったい誰と何を」
ほとんど答えはでかかってる。でかかってるがそんなはずはない。
振られた彼女とだってセックスに至るまでが長く、俺がヘタレなのかもしれないがそこまでなかなかたどり着かず、しかも下手だと言われた。
この際下手かどうかは関係ない。重要なのは、俺は行きずりの相手とそういう関係になる可能性はゼロだってことだ。

自分で考えてて虚しくなってきた。
男なんだから、女の子口説いてそういうことになることだってあっていいじゃないか。そうだろう？　今彼女いないんだし。
「あーー、もう。薬だ、薬を飲もう」
痛みをこらえて立ち上がろうとした時。
「何をさっきから一人で騒いでるの？」
「？…千歳…」
マグカップを持った従妹が立っていた。俺を見て恥ずかしそうに視線をそらして俯いた。彼女は素足で、俺のパジャマの上着をだぼっと着ていた。
太ももが白い。
俺の時間が止まった。

「えっと、あの桂くんはコーヒー飲む？」
「コーヒーより痛み止めが」
そこまで言って気がついた。俺は裸ではなかったか。
高2だったはずの従妹にこんな姿を見せてはならない。何かはかなければ。話はそれからだ。
もの凄く恐ろしい予想が頭を駆けめぐるが。
「服、着るから、千歳もちゃんと着て」

無言でお互い背を向けて服を着た。
俺は二日酔いの薬を飲んで、それで改めてコーヒー。

「桂くんは昨日のこと覚えてないの？」
「昨夜、俺は何をしたんだ」
「え、覚えてないんだ。怖かったけど、けどぼく嬉しかったのに」
「…うれしかった？」
「来て良いってメールくれたのに家にいないからどうしたんだろうと思って待ってたら、桂くん酔って大学の人に送られて帰ってきた。それは覚えてる？」
「覚えてないです、はい。それで？」
「水のませたりしてたら、急に服脱ぎだして、えっと、押し倒されて」

何をしているんだ俺！　小さいときから知ってる従妹だぞ。
懐かれてる自覚はあった。母親とケンカしたり険悪になると千歳がウチを避難場所にするのも知ってた。だから日頃から俺のアパートに出入りしていたわけだが、それを俺は、俺はなんて事を。
千歳は妹みたいなもんだぞ。考えたこともなかったことを。

「何言っても聞いてくれないし怖かったけど、愛してるとか好きだとかいっぱい言われて、桂くんのことぼくも好きだし。それで…」

千歳の声が尻すぼみに小さくなる。
「覚えてない」
独り言だった俺の言葉に彼女は泣きそうな顔をする。
「全部、嘘なの？」
「嘘っていうか、覚えてないんだけど…」
千歳は深い深いため息をついた。
「ぼくは桂くんが好きなの。だから桂くんもぼくを好きになって」
順番おかしいよとぼやきながらも俺の腕に抱きついてきた。

凄く困る。困るけど千歳はかわいい。
妹みたいなかわいい千歳。責任はとらなければならないだろう。

ほだされそうな予感がする。

発見

「あっ」

つい声をだしてしまった。だって驚いたから。そんなものを見ると思ってなかったから。独り言として聞き流してもらえる音量で、だれも振り返らなかった。よかった。

一時間目の授業中。前の席に座る友人の首にキスマークを発見した。驚いた。

だって彼女には好きな人がいて、その人は彼女を恋愛対象にみていない。彼女自身もそれをよく知っている。

それでも好きなんだって。そういうのってかわいい。

誰かを好きだって思ってる女の子ってかわいいと思う。基本的に女の子はみんなかわいい。

女の子は甘い物ときらきらした物といっぱいのステキな物でできているんだから。だからどうしたってかわいいの。

彼女は中でもひときわ輝いてる。

身長156センチ。私もそのくらいだったらよかったのにとよく思う憧れの身長。

細い割に胸もあるし、くせっ毛をパーマでふわふわにした髪型も似合ってるし、なにより顔がかわいい。くるんと大きな目とあどけない口元。

天使みたいな顔って、きっとこんなだろうなって思う。だから悪魔は彼女みたいな顔をしているに違いない。

断言するけど、彼女の性格は決して天使のようとは言えない。私は天使のような友人なんて退屈な物いらない。

ところでそのキスマークは誰がつけたの？

彼女は自分が軽く見られるのが大嫌い。軽い女と思われるなんてもってのほか。
そんな彼女がキスマークだなんて。自分を清純派と言って憚らない彼女なのに。
槍は降らなくても雹ぐらいなら降るかも。
制服の襟からのぞくキスマークってドキドキする。背徳的な感じのせいに違いない。
キンコロカンと鐘が鳴る。

「ちー、コンシーラ持ってる？」
「？　もってるけど、ぼくのじゃ色合わなくない？」
「ん、いいの。ちょっと付き合って」
こんな時に鏡があるからと女子トイレにいってはいけない。あそこは休み時間中、常に人目があるところ。こんな時は人があまり来ない校舎の端の階段が最適。

「首にキスマーク、あるの気づいてる？」
音が響くのでコソコソ耳元で言った。こういうとき階段って楽。千歳に一段上に立ってもらうと身長がだいたい同じくらいになる。
「はっ！　なにそれ。ムカツク。触られたってだけでもイヤなのに、そんなもんつけたの？」
ここにいない誰かについて千歳が怒ってる。
声、大きい。
「で、それは誰？」
大きな目をますます大きく見開いて、まずいこと言ったと顔に書いてある。
「たんなる好奇心だから別に私に教えてくれなくてもいいよ。私は

聞きたいけどね。話してくれるなら、それが目立たないようにコンシーラ塗ってあげるけど…？」

鏡もつかえないこんな場所では自分では上手く塗れない。お互いそれはわかってる。

千歳はため息をついた。

「塗って下さい」

「で？」

「川口雄樹」

「誰？　それ」

「桂くんの友達だと桂くんは思ってる」

千歳の大好きな従兄弟の桂くん。

「ちーは違う見解なのね」

「そう。絶対川口は桂くんを狙ってる」

「両方男の人だよね？　狙うというと」

「あいつは桂くんを…ホモにする気なんだから！」

声、大きいって気がついて、お願い。

「ホモは差別用語だからゲイって言って。陽気な人とかそういう意味の言葉になるから」

「川口が陽気かどうかなんて、たいした問題じゃないと思う！　寧ろあいつ陰険」

「ああ、まあ、落ち着いて」

他に言えることがない。

千歳のリボンを解いてボタンを二つ外して、襟をゆるめた。ブラウスにつかないように気をつけつつ、コンシーラをキスマークの上に塗る。小さな印だ、そんなことすぐ終わる。

「はい、もういいよ」
言って顔を上げた私に、「ありがとう」と言って千歳が頬にキスした。
キスというか、ちゅう?
二つの違いと言われても困るけど、セクシャルな意図の有無?
なんでそんなことされたのか、わからない。
そんなことされたことなかった。どういうことだかわからない。
わけわかんない。
固まる私の後ろで、バサバサと何かが落ちる音がした

発見（後書き）

もし何かを期待されているとするなら、それに沿えていない気がします。なんとなく。

一人称の子の名前をだし忘れました。

優しさ

音源の方を振り向いて、叶が固まった。

白皙の美貌が血の気をなくしてお人形みたい。
きっとまずいとこ見られたって思ってるんだろうな。
ま、そりゃそうだ。ブラウスの第2ボタンまで開けたぼくの首筋にかがみ込むようにした後に、ほっぺにキスされてるところを目撃されればね。ぼくのリボンタイ左手に持ったままで。
ここは女子校。見た子どう思っただろうね。

見られてるの知っててやったんだけどさ。
ぼくのことからかって遊ぼうだなんて、叶には百万年早い。

どうするのかと見ていると
「ごきげんよう」
と叶が無表情に言った。その前までを全部無かったことにすると決めたらしい。
かなり長い沈黙の後だからけっこうまぬけ。
「ご、ゴキゲンヨ・ウ」
目撃者は無かったことにしてくれないらしい。でもアホっぽさは同じくらい。
ひまわりの種を齧ろうとして落としたハムスター（そんなもの見たことないけど）、そんな感じ。

「落ちましたよ」
わざわざ階段を下りていってひまわりの種じゃないけど落としたものを拾ってあげた。ぼく優しいから、ほほえみ付きで。

彼女は返事もせずに受け取って、ぼくをにらんでから走り去っていった。

まぁなんということでしょう。ぼくの優しさは踏みにじられてしまったのです。

なんてな。

叶は校内でモテる。女子校なのに。

気持ちはわからなくもない。ぼくでさえ2日間ぐらい叶になってみたいと思うから。

お人形みたい、本当に。

身長170で体重48キロ。聞いたら簡単に教えてくれた。聞かれても恥ずかしくない数値だと思ってるのか、気にしてないのか。簡単に言うとモデル体型。運動もしていないくせに。

シミ一つ無い真っ白な肌で冷たく整った顔。表情があまり動かないから、実寸大の人形みたい。

たぶんあの子も叶に憧れてる後輩の一人なのだろう。

階段を上って走り去る後輩をぼんやりと見送って（叶の顔はぼんやりしててもそう見えないがぼくくらいになれば見破れる）、思い出したようにリボンタイをぼくに返した。

「あの顔どっかで見たことあるような感じがする」

「ホントに？　どこで？　知り合い？」

「さー？」

「ぼーっとしてないでもっと声張っていこうよ！」

「…落ち着いた方がいいと思うよ、ちーは。桂くんを川口だっけ？から守ること考えなきゃいけないんだし、ね？」

話を戻しやがった。全部なかったことにする方向を続行中か。
「カナカナはもっと慌てようよ。キスシーン見られたんだよ？　知り合いに」
「知り合いかなぁ？　別にいいんじゃない？　ほっぺにちゅうぐらいかわいいものでしょ。そんなことすぐ忘れるって。考えることはいっぱいあるんだし」
断言するけど、そんな簡単に忘れないから。
お昼ご飯食べたらこんなことどうでも良くなるとか、絶対叶は思ってる。見かけに反して食べるの大好きだから。食欲と睡眠欲を中心に生活してる。恋愛など出てくる隙はない。
世の中全部自分と同じだと思ったら大間違いだ。
噂の伝達速度は光よりも速い。今日の放課後には学校の公認カップルにぼくたちはなっている。
そんなこと気にするぼくらじゃないけどさ。
そして放課後。ショートホームルームが終わって帰ろうと言ったら断られた。
「今日は風紀委員の見回りする日だから先に帰ってて」
まったく風紀を取り締まっていない風紀委員会の仕事は、月に二度二人組になって放課後に校内を見回ること。窓の鍵など閉めて回っているらしい。当番は年に一回しか回ってこない。
それ委員会の仕事として必要？　しかも月に二度ならやらなくてもよくない？
教室をでようとしたら見たような顔がいた。

「高野先輩！」
叶を呼んでいる。風紀委員の相方だろう。
横を通り過ぎようとしたら睨まれた。ああこの顔は。
「高野先輩見回りまで時間あるので一緒にいていいですか？」
鞄を持って近づいてきた叶は鷹揚に頷いた。
叶は一人でいるのが嫌いだから、内心たぶん喜んでいるのだろう。
「それで、休み時間に二人で、階段で、何をしていたのか教えてもらいたいんです」
叶が鞄を落とした。
ぼくはやさしいので、ほほえみ付きで拾ってあげた。

優しさ（後書き）

叶は「かなえ」と読んで下さい。
次は誰視点がいいか、リクエストってありますか？

告白

放課後とはいえ校舎にはたくさんの人がいてどこで話したものだかちょっと悩む。
なんといったって、これから私はとても込み入っていて且つ重要な話をするのだから。
いろいろ悩んで図書館の裏の腰の高さまである花壇の縁に腰掛けた。

「先輩は園生先輩と、どういう関係なんですか？」
「どうっていうと？」

先輩はいぶかしげに眉をひそめる。
冷たく見えるほど整った顔をこんなふうに動かしているのは自分だと思うとゾクゾクする。
「じゃぁ、先輩のこと高野先輩じゃなくて、叶先輩って呼んでもいいですか？」
「別にいいけど、それとこれとはどう話が繋がるの？」
「先輩は苗字じゃなくて名前で後輩に呼ばれたことありますか？」
「ない」
やっぱりな。そうだと思った。

「特定の後輩だけに名前で呼んで良いことにすると、その後輩と特別な関係になるって知ってました？」
「知らない」
「そうですか。でもだめですよ、取り消しはききません。良いって一回は言ったんですから」

ひそめていたはずの眉がもとに戻り、先輩の顔から表情がなくなっている。

怒ってるのかも。

「何がしたいの？」

「端的に言うと、先輩の特別になって、将来的には恋人になりたいと思ってます」

先輩絶句。あはは、かわいー。

「先輩は園生先輩と付き合ってるんですか？」

「違う、友達。一番仲がいいけど、普通に友達」

「嘘ついてません？」

ついていないついていないと、恐ろしい物に遭遇したかのように首を振る。

「叶先輩は付き合ってもいない人とキスするんですか？」

考えるように視線をさまよわせてこちらを見た先輩は透明の視線。

「キスはしてないよ」

は？

「してたじゃないですか、階段で！」

「あれは、…キスじゃないでしょ？」

でしょ？　って何。

無機物みたいな先輩は、所詮動物な私とは違う論理の世界に住んでいるらしい。

それとももっとディープなのしかキスにカウントしないとかそういうこと？

そんなの先輩らしくない！　わけがわかんない。

「私から質問いい？」

条件反射で頷く。

「私と千歳がキスしてたと思ってるのよね？」
ＹＥＳ
「キスは付き合っている人とするものと定義しているよね？」
ＹＥＳ
「私と千歳が付き合っているってことになるよね？」
…ＹＥＳ
「私は同性愛者なの？」
「違うんですか？　二人が付き合ってるってことはそういうことじゃないですか」

「千歳と付き合っているなら私はあなたと付き合うことはないだろうし、付き合っていないとしたら同性を恋愛対象にみていないわけだからあなたと付き合うこともない。そういうことだよね？」
先輩は感情をのせない顔のまま言った。

その通りだ。その通りだけどなんか違う。
「先輩は自分がどう思ってるか言ってない。私がどう思ってるかは言われるまでもなく知ってる。それを、先輩がどう思ってるかが知りたいんです。私の頭の中だけ暴いて、先輩の気持ちが一個もわからない。そんなのずるい」

そこで先輩がいきなり照れた顔をして面食らう。
「端的に言って、かわいいなぁと思ってるよ」
先輩それは唐突すぎます。
「脈ありってことですね！」
「えっと、そういうわけでもないんだけど。とりあえず名乗ってくれない？」

そこからですか。

告白（後書き）

また名前がでてこない。
というか決まってない。

仕込み　上

「相談に乗って欲しいんだけど、時間あるか？」
早瀬桂がそう言ったとき、さっそく何をやったのかと小柄な早瀬の従妹を思った。

学食に誘ったら外がいいと言うので最寄りのファミレスに向かった。

注文したコーヒーが来るまで早瀬は無言だった。
コーヒーが来てからはスプーンでコーヒーをかき混ぜ続けている。
砂糖も入れずに。
いい加減何か言って欲しいものだ。動揺はわかったが。

「川口、俺はどうしたらいいと思う？」
追いつめられているようだ。
「何があった」
「あそっか、説明しなきゃな。俺、最低なことを」

簡単にまとめる。
二日酔いで目が覚めると自分は全裸だった。
半裸の従妹が部屋にいた。
従妹は昨晩、合意で自分たちがセックスしたと言った。
自分は筋肉痛で且つ腰が痛い。
今後どのように責任をとるべきだろうか。

園生千歳やるな。あいつはあなどれない。早瀬の従妹とは思えない。
まず何が凄いって、仕事が速い。
ことの起こりは昨晩。問題の根はもっと深いが。

飲みの後酔っぱらったこいつをアパートまで送っていったことだ。
それ自体は過去何度もあった。そしてこれも何度目かのことだが、
そこに千歳がいた。

早瀬は酒に弱い。
自覚もあるようだ。
だが酔うと自分がどうなるかは知らないだろう。

毎回やることとは違うが奇行に走る。
笑い上戸になるときも泣き上戸になるときもあった。しかしそれなら普通だ。
ある時は何故かケンケンし続けた。移動全部ケンケン。平衡感覚おかしくなっているというのにケンケン。やたら転んで迷惑だった。
たまたま座敷だったときは腹筋を始めたときもあった。
今なら飛べると言い張るのを二人がかりで止めたことも。
割り箸を割り続ける。店の人に怒られた。
全部の靴の右足と左足を違う組み合わせにして隠す。
奇想天外としか言いようがない。

それをして楽しいのか？
酒に飲まれないたちなのでよくわからない。
一連の行動の後、早瀬は寝る。必ず。そしてほぼ全てを忘れる。

昨晩やつはいきなり反復横跳びを始めた。
左右の定位置の床に触って、中腰であの妙な動きをした。
酔いが回るだけだ。

早瀬が寝る前にということで解散していつものように送っていく途中、

こいつは突如走り出し、何もないところで滑りこけた。
見ていて飽きないというのはこういう奴のことを言うのだろう。
彼曰く
「酔ってないところをみせてやる。見てろよ！」と。
頭を打ったかと心配したが尻と腰を打つに留まったらしい。

そして肩を貸しつつやっとアパートへ。
鍵をどこにやったかという問題でドアの前で一悶着やるのが定番だ。
がしかし、昨晩は中からドアが開く。

「やっぱり川口だ。桂くんの家に上がり込んで何する気?!」
一体何ができると?
「あんたの思うようになんかさせないんだから」

仕込み　上（後書き）

すみません、長くなってきたのでいったん切ります。
次も川口視点です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5094e/

論破できるならしてみればいい

2010年10月21日21時38分発行